

## 授業内アクティビティ・チャレンジ

第 151 回関西スペイン語教授法ワークショップ (TADESKA) 例会

日時：2022 年 3 月 16 日 (水) 15:00 - 17:00

場所：Zoom を利用したオンライン開催

担当：宮本愛梨

## Muestras de actividades en la clase de español

CLI Reunión del Taller de Didáctica de Español de Kansai (TADESKA)

Fecha y hora: Miércoles, 16 de marzo de 2022, de 15:00 a 17:00

Lugar: En línea (Zoom)

Ponente: Airi Miyamoto

\*\*\*\*\*

本発表では、発表者が 2021 年度の授業内で行ったアクティビティを紹介した。アクティビティ内容のほか、学生の反応や発表者の反省、感想を延べ、その後、参加者同士で意見や情報を交換し合う時間を持った。

### 〈アクティビティ実施の動機と目的〉

教員が、学生のスペイン語習得を応援するつもりで授業をしても、学生の多くがスペイン語の学習/履修を「卒業するために取り組まなければならないもの」と捉えていることに、寂しさと、第二外国語の授業そのものの存在意義に疑問を感じていた。そこで、授業内アクティビティを行って、自分がスペイン語を学ぶモチベーションとなったことを学生に伝えてみることにした。

### 〈歌で文法スペイン語〉

Juan Magán feat. Pitbull, El Cata の [“Bailando por el mundo”](#) という楽曲を使って、点過去の聴き取りと現在分詞、比較級の学習を行った際の事例を紹介した。

使用したのはサビ部分の 4 フレーズで、学生たちには、ここから期末試験で 2 問程度出題する代わりに現在分詞や比較級の質問は教科書等からは出さない、と伝えてあった。

しかし学生の多くは、期末テストでは正答数は少なく、部分点狙いの珍回答が続出した。採点者の感触としては、ここから出される 4 点(2 問)より、他の配点が高そうな箇所の学習に力を注いだ、ということかと思われる。

### 〈歌でスペイン語圏文化紹介〉

授業内では、Shakira feat. Carlos Vives の、[“La Bicicleta”](#) という楽曲を用いて、歌詞の日

本語訳を辿りながら、コロンビアとその音楽文化、**Shakira** のリアルなバックグラウンドについて、文化人類学的視点を挿みながら紹介した。本発表では、授業内のプレゼンをほぼそのまま再現した。

#### 〈スペインのみなさんと1往復文通プロジェクト〉

スペインで日本語講師をしている発表者友人の発案で、スペインで日本語の講座の受講生と、発表者が担当するクラスの学生との、1往復文通を行った。スペイン語と日本語併記で、日本の学生がクリスマスカードを書き、スペインの日本語学習者が年賀状を書く、そしてそれを講師が国際郵便で郵送、という形をとった。スペインの生徒数と日本の学生数が違う、当日欠席者の対応、コロナの影響で国際郵便事情が通常と異なり、郵送に非常に時間がかかってしまったことなど、実際にやってみたら大変なことが多かった。しかし学生の方は、単位取得のための学習になりがちなスペイン語が実際に社会で使われているものであった、ということの再認識につながったり、SNS アカウントを交換することで今後のスペイン語学習のモチベーションになったりしたようだった。

#### 〈コップ芸救済措置〉

Paula Rojo の [“Si me voy”](#) という楽曲 MV に、若者たちがプラスチックコップを使って芸をするシーンが盛り込まれている。この [コップ芸のやり方を Paula 自身が解説している動画](#) もあり、学生と *derecho/a, izquierdo/a, mano...* などといった基本単語をあらかじめ確認したうえで解説動画を視聴した。

授業内で実際にコップ芸の練習をしてみる、ということにはしなかったが、授業態度は真面目なのに授業内テストで点が取れず、合格点に到達しない学生がいたことから、「動画の解説をよく聴き、コップ芸ができるようになったら点数を加算する」とアナウンスした。最終授業終了後、学生数人がコップをもって教室に再集合し、コップ芸を実演して単位取得にこぎつけた。

#### 〈ダンスでスペイン語〉

春学期最後のコップ芸の件を受けて、語学に苦手意識を持つ学生のためにも、アクティビティを通じてスペイン語に触れる、というアプローチ方法が有効な場合もある、と考え、秋学期では、簡単なダンスを授業に取り入れることにした。簡単なダンスというのは、Zumba® というフィットネス・ダンスである。Zumba® の楽曲の 7 割程度がスペイン語で歌われているものなので、その中から動作や動かす身体のパーツが歌詞に盛り込まれた楽曲を選んで学生たちと踊った。採用したのは、S.B.S. というキューバのグループの [“Sigue al líder”](#) と Bela Hamilton の [“Cinturita”](#)<sup>1</sup> という楽曲を用いたコレオ・ビデオである。発表内では、学

---

<sup>1</sup> ここで紹介した動画は、発表者の友人でもある Zumba® インストラクターに依頼して個人的に撮影、編集したものである。TADESKA 例会では、インストラクターの許可を得て動画再生をした。ここにリンク

生たちを撮影させてもらった動画から個人が判別できない程度まで引いて撮った箇所を数十秒紹介した。動画の雰囲気や参加した学生たちの感想から、彼らもそれなりに楽しんでくれたように感じているが、参加した学生が少なかったクラスもあった。

〈質疑応答〉

例会終了時間をまたいで質疑応答/意見交換となったが、形式や話題に大きな違いはなかったため、以下にまとめて記述する。また、類似のアクティビティを行った際の経験談や楽曲、映画作品などについても有用な情報交換がなされたがここでは割愛し、いくつか核心的と思われる質疑応答とコメントに絞って記載することにする。

\* ( )は、発表者加筆箇所

質問：(学生のモチベーションをアップする目的と冒頭で説明があったが、)どんなモチベーションがアップしたか？

回答：印象としては、授業そのものについてのモチベーションが上がったように思う。勉強というよりは、授業に出るモチベーションが上がった。

コメント：音楽は、ビデオに風景など文化背景が映るのでよい。ジェンダーという観点から言えば、女性をどう映しているかを考えてビデオを選ぶことが大事。(特に「歌でスペイン語文法」で採用した”**Bailando por el mundo**”について。同様意見複数)

回答：素材の選択は今後気をつけていきたい。今回選んだ楽曲については、歌手のスタンスなどを解説したうえで楽曲を流した。

質問：小テストの点数は上がったか？モチベーションが上がったことが学習結果につながったか？

回答：次年度の課題となった。自分の到達点は「スペイン語を続けようと思う。きらいにならないでほしい」と思ってもらうこととしていた。ただちに「スペイン語がんばろう」までは行かなかったが、学習の定着に持って行くために新たな仕組みが必要だと思った。

コメント：スペイン語の学習で歌を使うのは難しい。選択問題にするなど、学生が答えやすいよう工夫をするとよい。(同様意見複数)

回答：参考になる。改善していきたい。

質問：特にこのジャンルを使って授業をするという計画はあるか？

回答：特にない。(今後は)フラメンコとか(も紹介したい)。フラメンコポップなどもあり、

---

を貼るのは控えるが、”Cinturita Zumba”などのワードを使って検索すると、主だったコレオグラフィー動画が上がってくる。

[India Martínez](#)(質疑応答の際は Indina と行ってしまったが、間違い)など、社会的に深いことを歌っている歌手もいるので、紹介したい。できればいろいろなものがあるということをしつづつ伝えて、(学生が)興味を(持てるジャンルがあれば)追求してほしい。

〈まとめに代えて〉

個人的には、自分の授業が独りよがりなものになっていないか気になっていたところ、例会に参加された方々から率直なリアクションをいただくことで、多くの気づきにつながる貴重な機会となった。

当日は掘り下げた話はできなかったが、私見としては、翻訳技術のめざましい発達や、実際英語が使われる場面が多いといった理由から、外国語の学習のみに特化した授業を必修にする必要はないと考えている。ここ数十年のグローバル化に伴い、大学での第二外国語の修得目的が、コミュニケーションスキルの向上へと向かっていたように思う。しかし、大学での第二外国語の授業だけで自由自在にコミュニケーションをとれるレベルまで到達することは不可能である。そしてそれが明らかでありながら語学を必修とする制度は、学生、教員双方の不幸につながると考える。そうは思っても、直ちに制度を変えることは難しい。さしあたって現状を受け入れつつ、必修で履修している学生たちに少しでも能動的に言語と向き合ってもらうことを願って試みた活動が、今回の発表で紹介したものであった。その後、必修であるなしにかかわらず、緩めのモチベーションで履修をしている学生たちの授業に対する意欲増進も期待できると考え、選択のクラスでも実践することにした。

授業全体として見ると文法的な学習時間は相対的に減るが、学生たちに異文化とそこで暮らす人々のことを知ってもらい、言葉が人と世界へつながるひとつのツールであるということを実感してもらう方に重点をシフトしたひとつの事例となり得たかもしれない。

今回の発表は今後の TADESCA の議題を意識して準備したものではなかったが、結果的に関連的な話題提供、あるいは導入的な役割を少しでも果たせていれば、幸甚である。

最後になってしまったが、至らぬところの多い私のアクティビティ混じりの授業に付き合ってくれた学生たちと、年度末の繁忙期にも関わらず予定を工面して TADESCA 例会に参加して下さった方々に謝意を表したい。そして、私の持ち込み企画を快諾し、アドバイスの手間を惜しまず、お悩み相談まで付き合ってく下さった TADESCA のお世話役である小川氏と柳田氏には、この場をお借りして特別な感謝の気持ちを伝えたい。